

「のだ」「のか」の習得上の困難点について

大場理恵子

要 旨

本稿では、「のだ」「のか」を使用しなくてはならない条件、また「のだ」「のか」を使用できない条件を明らかにしたうえで、そのどこに、学習者の習得が困難な点、誤用を起こしやすい点があるのかを文法正誤調査によって分析した。その結果①「のだ」「のか」を使わなくては（使っては）いけない箇所でも「使ったほうが（使わないほうが）いい」程度に理解されている。②「のだ」については、前提Xが想定できるものよりできないもののほうが難しい。使用条件では、ア「因果関係」、イ「判断、要求、勧誘、ことわり等とその根拠」、ウの「実情説明、言い換え」、エの「本来述べたいことがあることを暗示する」の順に習得し易い。③「のか」については、疑問詞疑問文より真偽疑問文の方が習得しやすい。「感想・嗜好・欲求を驚き・非難等といった含意無しに聞くときは、『のか』は使えないこと」の理解が難しい。といったことなどが分かった。

〔キーワード〕 「のだ」、「のか」、誤用、使用条件、非使用条件

1. はじめに

「のだ」という表現が文末にくる文には、「その本は私のだ。」というような「の」を「(の)もの」等の名詞に置き換えられるものと、「雨が降っているのだ。」というような、「の」を名詞に置換することが不可能なものがある。後者はいわゆる「のだ」文といわれるものであり、モダリティの異なる「のだ」抜き文（例「雨が降っている。」）と対応することが可能である。本稿で扱う「のだ」とは後者であり、「のか」とはその疑問表現である。（注1）

「のだ」「のか」のそもそもの組成は、準体助詞「の」+助動詞「だ」および準体助詞「の」+助詞「か」である。先行研究は、「のだ」の意味・用法を

記述する試みから、「のだ」「のか」「のだろう」「のではない」といった表現に共通する準体助詞「の」の統一的機能を解釈するものへ移行してきた。

その機能とはすなわち次のようなものである。「Yのだ」は「XはYのだ。」という題述文の述語部分が現れたものである（注2）、「Yのだ」は前提Xについて、話し手がどう認知しているかを表す役割を果たす。言い換えれば、Xという前提と、Yという命題を話し手がどう認知しているかを結び付ける働きを「の」が果たしているといえる。（注3）

一方、日本語教育においては、日本語学習者にとって「のだ」を正確に使用するの難しいことであると度々指摘されるにもかかわらず、その誤用研究は数少ない。（注4）本稿では、「のだ」「のか」を使用しなくてはならない条件、また「のだ」「のか」を使用できない条件を明らかにしたうえで、そのどこに、学習者の習得が困難な点、誤用を起こしやすい点があるのかを文法正誤調査によって分析する。

2. 「のだ」「のか」の使用条件について

小金丸(1990)は、作文における学習者の「のだ」の誤用例を分析し、①形の誤り②非用③不適切な使用の3つに分類している。本稿では、形の誤りについては扱わず、「のだ」の誤用を、①非用…使うべきところで使わない②過剰使用…使うべきでないところで使う、の2つに分類する。「非用」は「使用条件」の不理解から起こり、過剰使用は、「非使用条件」の不理解から起こるものであると考えられる。とすると、学習者が誤用を起こしやすいのは、どの使用条件もしくは非使用条件であるのかを調査することが、「のだ」の習得における困難点を明らかにするのに有効であろう。

次に「のだ」「のか」の使用条件・不使用条件をそれぞれフロー図に図示する。（図1）（図2）このフロー図は、先行研究で記述された意味・用法・機能等（注5）を参考に、「のだ」の使用される条件と使用されない条件をなるべく網羅するように作成を試みた。

まず、「のだ」の使用条件であるが、基本的に「Yのだ」は、前提を話し手がどう認知しているかを表すものであり、前提となる文や状況Xを必要とする。（Q1a）ただし、前提が想定できないものでも、Q4bのⅠⅡの様に「のだ」を使う場合がある。

(図1) 「Yのだ」の使用条件・非使用条件 フロー図

- Q1 a 前提となる文・文脈・状況が具体的に想定できる ⇒Q2へ
 b 前提となる文・文脈・状況が具体的に想定しにくい ⇒Q3へ
- Q2 前提XとYの関係が
 a 因果関係である。 ⇒「のだ」ア
 b 判断、要求、勧誘、ことわり等とその根拠という関係である
 ⇒「のだ」イ
 c その他の関係(実情説明、言い換え) ⇒「のだ」ウ
- Q3 a 情報が既に共有されている ⇒ ~~「のだ」~~ (い)
 b 情報が共有されていない ⇒ Q4 へ
- Q4 a 客観的な情報伝達や単なる事実の描写である。 ⇒ ~~「のだ」~~ (き)
 b I 本来述べたいことがあることを暗示する場合。 ⇒「のだ」エ
 II 当為表現の場合 ⇒「のだ」オ

Q2a(ア) は、Xが結果で、その原因を「Yのだ」で述べるものである。(注
 6) 「のだ」=「からだ」と言い換えることが可能である。

例1) 先生「Aさん、昨日はどうして休んだんですか。」

A「すみません、頭が痛かったんです。」

Q2b(イ) は、Xが判断、要求、勧誘、ことわり等で、その根拠を「Yのだ」
 で表すものである。

例2) A「Bさん、明日僕の家でクリスマスパーティーするんですが
 来ませんか。」

B「うーん、明日はちょっと…。国の両親が来るんです。」

例3) 子供「お父さん、お金を少し貸してください。本が買いたいん
です。」

Q2c(ウ) は、Q2a、Q2b 以外のX、Yの関係であり、「言い換えると」「要す
 るに」「つまり」「結局」「というのは」などといった言葉でXとYを結べる
 ものである。文脈によっては「納得」「意外」「驚き」等といった含みを持つ
 ことがある。

例4) (テーブルの上の御馳走を見て)「あっ、今日は父さんの誕生
 日なんだ。」

Q4b-I IIは、Q1b の前提Xが想定しにくいもので、かつQ3b の情報が共有されていないものであり、なおかつQ4a の客観的情報伝達や単なる事実描写でないものである。I (エ) は例えば会話の切り出しで「のだ」を使うものである。

例5) A「Bさん、私、昨日有名人に会ったんです。」

B「へえ、誰ですか。」

A「宮沢りえです。」

この例のように会話の切り出しで「のだ」が使われると、本来結び付けられる命題Xの存在が想定され、これから本当に伝えたいことの話が続いていくことを暗示する効果がある。また、

例9) A「昨日は何を食べましたか。」

B「お寿司を食べたんです。」

という会話で、Aの質問に対して、「食べました」と答えるのが普通だが、例9の様に「食べたんです」と答えると、「一度食べてみたいと思っていた念願のお寿司を食べることができた」とか「お寿司を食べたがお腹をこわしてしまった」といったような、何か次に言いたいことがあることが暗示される。また主節の前置きとして「のだ」が用いられるものであるが、同様に、本來說明されるべき主節Xの存在が暗示される効果がある。

例6) 学生「あう、この本をコピーしたいんですが、どこで頼めばいいですか。」

例7) A「Bさん、明日僕の家でクリスマスパーティーするんですが来ませんか。」

II (オ) の当為表現は、ある状況において、話し手の判断で、聞き手・話し手の望ましい行動を述べるもので、聞き手の行動について言えば「命令」の用法になり、話し手自信の行動について言えば「決意」になる。

例8) (TVゲームを始めようとする子供二人)

A「ぼく、今日は3000点出すんだ。」

B「ぼくは5000点出すぞ。」

A「この飛行機をやっつけるぞ。」

B「わー、やっつける、ピストルで打つんだ。」

次に「のだ」の非使用条件であるが、前提Xがないもののうち、情報が既に共有されているもの（既に共有されている情報について始めて発話するものの意）Q3a (b) は、前提Xがないということに矛盾してしまうので「のだ」は使

用できない。例えば「昨日地震があった」ということを聞き手も知っている場合には、会話の切り出しに

例8) 昨日地震がありましたけど、大丈夫でしたか。
と言うことはできるが、

例9) 昨日地震があったんですけど、大丈夫でしたか。
とは言えない。例9の様に「あったんですけど」とすると、聞き手が「昨日地震があった」ことを知らないことになる。つまり、このQ3a(i)は一見前提がないようだが、話し手と聞き手の共通認識としての前提Xが存在するものである。また、前提Xがないもののうち、情報が既に共有されていることがない場合は、Q4a(5)の客観的な情報伝達や単なる事実の描写となり、「のだ」は使用できない。

例10) あっ、財布がない。きっと公園で落としたんだ。
という文では、1文目は、発生したばかりの事態を単に描写する文であるので「のだ」は必要ない。2文目は、その事態を前提Xとすると、その実情を説明するQ2C(ウ)の条件で、「のだ」が必要となる。

(図2) 「Yのか」の使用条件・非使用条件 フロー図

1. WH疑問文の場合

- Q1 a前提(尋ねること)が既定である ⇒ Q2 へ
b前提(尋ねること)が未定である ⇒ ~~「のだ」~~ (は)
Q2 a中立的・客観的である。もしくは感想・し好・欲求等を驚き・非難等の含意無しに聞くものである ⇒ ~~「のだ」~~ (に)
b関心・興味・驚き・意外・非難・憤慨・困惑・詰問等の含意がある
⇒ 「のか」カ

2. YN疑問文の場合

- Q1 a共有する前提Xがある ⇒ Q2 へ
b共有する前提Xがない ⇒ ~~「のだ」~~ (は)
Q2 a名詞述語文もしくは感想・し好・欲求等を聞くものである
⇒ Q3 へ
b名詞述語文 感想・し好・欲求等を聞くものではない ⇒ 「のか」キ
Q3 a驚き・意外・非難・憤慨・困惑・詰問・納得等の含意がある

b 特別な含意がない

⇒ 「のか」 ク

⇒ ~~「のか」~~ (ハ)

「Yのか」については、疑問詞疑問文（WH疑問文）と真偽疑問文（YN疑問文）とでは条件が異なる。まず、WH疑問文は、話者と聞き手の共有する前提状況Xの補足説明を聞き手に求めるものであるので、前提Xがあることは自明のことである。では、WH疑問文における「のか」の使用条件は何か。まず、Q1a の前提（これから尋ねること）が既定である、ということだ。前提（これから尋ねること）が未定のことであるとわかっている場合(Q1b(β)) は非使用条件となる。

例11) 「いつ出発するんですか。」（既定）

「いつ出発しますか。」（未定）

次に前提が既定であって、関心・興味・驚き・意外・非難・憤慨・困惑・詰問等といった含意がある場合(Q2bカ) は、「のか」を使う。話者が話題の実情に対して中立的・客観的態度をとる場合や、驚き・非難等の含意無しに聞くもの(Q2Ak)は、「のか」を使わない。例えば個人的な質問をする場合に、

例12) 初詣、どこへいらっしゃったんですか。

と聞いて、相手に対する関心や興味を表し、親しみを込めることができる。一方TVなどで、一般視聴者に向かっては、

例13) 皆さん、初詣はどこへいらっしゃいましたか。

と「のか」を使わない。また、聞き手の感想・し好・欲求等を特別な含意無しに尋ねるもの(Q2Ak)も「のか」は使わない。

例14) （昼食に何を食べるかを相手に尋ねて）

「何、食べたいですか。」（×食べたいんですか。）

次にYN疑問文であるが、「のか」のYN疑問文は、「話者と聞き手の共有する前提状況Xに対する話者の理解Yが適切であるかを聞き手もしくは話者自身に問うもの」と定義づけられる。まず、共有する前提Xがあるかどうか条件となる。前提Xがなければ(Q1b(β)) 「のか」を使用することはできない。

例15) （夏休み明けに始めて会って）「夏休み、旅行しましたか。」

（×旅行したんですか。）

また、前提があれば、「のか」を使うことが普通だが(Q2b キ)、名詞述語文や感想・し好・欲求等を聞くものでは、普通は「のか」は使われず(Q3b(ハ))、

驚き・意外・非難・憤慨・困惑・詰問・納得等の含意がある場合には「のか」を使用する。(Q3a ク) (注7)

例16) (長崎カステラをお土産にもらって)

キ「長崎にいらしゃったんですか。」

(?いらしゃいましたか。)

(ハ)「長崎カステラですか。」

ク「長崎カステラなんですか。」(長崎カステラはきらいだから
がっかりだ、等といった含意を感じさせる)

3. 調査方法

調査目的は、学習者にとって、「のだ」「のか」の習得困難点を明らかにすることである。なお今回の調査は会話文(話しことば)に限定した。

調査方法は、当該文が正用であるかどうかを判定させる○×式文法判定テスト(正しければ○、正しくなければ×、どちらともいえなければ△、わからなければ無記入とした。)を行った。調査対象は日本人57名、学習者57名(韓国22名、中国26名、その他9名)。学習者は学習暦14ヶ月以上の中上級の就学生であり、いずれも日本語能力試験1級合格もしくは受験者である。

分析方法は、まず、設問の内、日本人の使用率もしくは非使用率($\frac{O}{O+X}$, $\frac{X}{O+X}$)が75%以上のものを分析対象とし、日本人使用率が75%以上のものは「使用文」と考え、非使用率が75%以上のものは「非使用文」と考えることとした。次に学習者において「習得指数」を以下のように定義し、その数値が大きいほど習得の度合いが高いと考えた。

「使用文」 : (○と判定した人の割合) - (×と判定した人の割合)

「非使用文」 : (×と判定した人の割合) - (○と判定した人の割合)

習得指数がマイナスというものは、「使用文」であれば、日本人は使用するにもかかわらず、学習者は×と判定した人の割合のほうが多かったということであり、「非使用文」であれば、日本人は使用しないにもかかわらず、学習者は○とした人の割合のほうが多かったということになる。

4. 調査結果と分析

4-1 「のだ」について

調査で使用した例文は次の通りである。(注8) ア～オ及び(イ)(3)は(図1)

による。設問番号は調査使用時のもの。なお選択肢がaもしくはbの一つしかないものは、日本人の使用率および非使用率が75%未満であった選択肢を分析からは割愛したためである。

<「のだ」使用条件>

ア：因果関係

(6) 前述の例1 (「痛かったんです」の部分か空欄)

a 痛かったです b 痛かったんです

イ：根拠

(11-2) 前述の例2 (「来るんです」の部分か空欄)

a 来ます b 来るんです

(21) 前述の例3 (「買いたいんです」の部分か空欄)

a 買いたいです b 買いたいんです

ウ：実情説明、言い換え

(1-2) 前述の例10 (「公園で落としたんだ」の部分か空欄)

a 公園で落とした b 公園で落としたんだ

(19) A 「Bさん、来月お国へ帰るそうですよ。」

C 「えっ、お国へ？Bさん、日本人じゃないの？」

A 「アメリカ人ですよ。おじいさんは、日本人ですけど。」

C 「_____。知らなかった。」

a アメリカ人だ b アメリカ人なんだ

(2) A 「Bさん、今日は。感じが変わりましたね。あっ、髪形を_____。」略

a 変えました b 変えたんだ

(5) 先生 「Aさんが、いませんね。遅刻かな。」

B 「Aさんは、今日は休みかもしれません。昨日お腹が痛いと言っていましたから。」

先生 「どうしたんでしょう。」

B 「Aさんは、このごろ _____。毎日、夜2時ぐらいまで勉強して
いると言っていましたよ。」

b 疲れているんです

エ：本来述べたいことがあることを暗示

(8) 前述の例6 (「コピーしたいんですが」の部分か空欄)

a コピーしたいんですが b コピーしたいんですが

(11-1) 前述の例7 (「するんですが」の部分か空欄)

bするんですが

(7) 前述の例5 (「会ったんです」の部分か空欄)

b会ったんです

オ: 当為表現

(9-1)(9-2) 前述の例8 (「出すんだ」「打つんだ」の部分か空欄)

1 b出すんだ 2 a打つ b打つんだ

<「のだ」非使用条件>

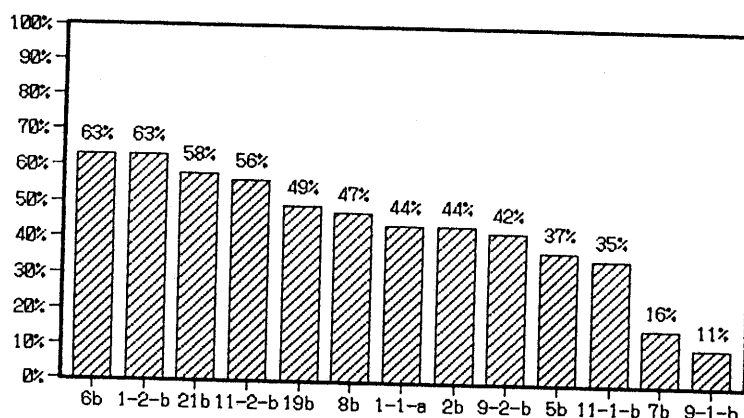
(い): 情報が共有 …なし

(ろ): 事実の描写

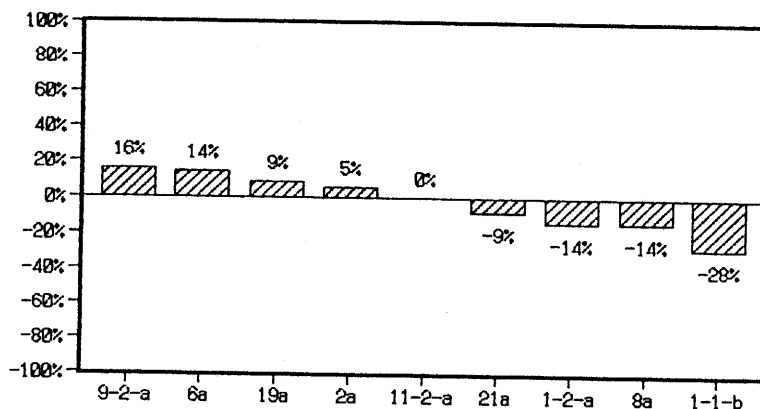
(1-1) 前述の例10 (「ない」の部分か空欄)

aない bないんだ

グラフ 1

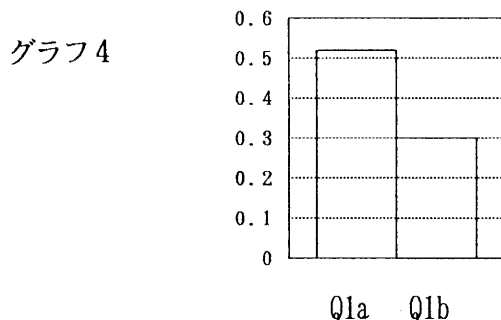
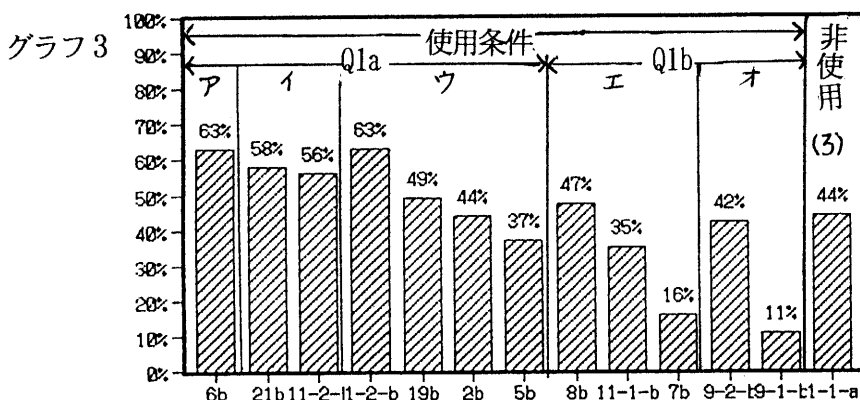


グラフ 2



まず、グラフ1は「使用文」を習得指数の高いものから並べたものであり、

グラフ2は「非使用文」を習得指数の高いものから並べたものである。使用文の平均値は43であり、非使用文の平均値は-2である。つまり、学習者は、「のだ」文（例えば(19)アメリカ人なんだ）をそこで使うことはわかっているも、対応する「のだ」不使用文（例えば(19)アメリカ人だ）は使えないことへの理解度が低いといえる。簡単に言うと、「のだ」を使わなくてはならない箇所でも、「使ったほうが良い」程度に理解しているということである。



次にグラフ3はグラフ1を使用条件別に並べ替えたものである。アイウが前提Xが具体的に想定できるもの（Q1a）であり、エオが前提Xが具体的に想定しにくいもの（Q1b）である。グラフ4はQ1aとQ1bの平均値を表したものである。これから、前提Xが想定できるものより、想定できないもののほうが習得指数が低いことがわかる。

使用条件別にみると、アの「因果関係」、イの「判断、要求、勧誘、ことわり等とその根拠」は相対的にいえば習得し易く、ウの「実情説明、言い換え」はそれに次ぐ。エの「本来述べたいことがあることを暗示する」はばらつきがあるものの全体ではウより習得しにくい。オは2つの設問（命令と決意）で結果にばらつきがある。さらに設問内容を検討すると、ウのなかで突出して習得

指数の高い設問1-2は、「財布が無いのは公園で落としたからだ。」というようにXと「Yのだ」の間に因果関係を見いだすこともできる。その為習得指数が高くなったと思われる。また、エの中で習得指数の高い設問8は主節の前置きで「～たいんですけど、…（～たいんですが、…）」という文型である。この文型はよく教科書で採り上げられるものである為習得が容易なのだろう。小金丸(1990)で指摘されているように、この表現との混同が原因で、書き手の感情や意志を表現する文（例：私の国は日本と非常に違っていますから、いくらかの判別について説明したいのです。…小金丸(1990)による）においても「のだ」を過剰使用することもある。オの当為表現は決意を表す設問9-1の習得指数が11%と一番低い習得指数となった。これは教科書でもとりあげられることの殆どない用法であり、またどちらかというと子供の使う表現であることから接する機会の一番少ない表現であることが予想される。

4-1 「のか」について

調査で使用した例文は次の通りである。カキ及び(ハ)(ニ)(ホ)は図2による。設問番号は調査使用時のもの。なお選択肢が一つしかないものは、日本人の使用率および非使用率が75%未満であった選択肢を分析からは書愛したためである。

<「のか」使用条件>

カ：WH疑問文…前提が既定であり、特別な含意がある。

(18) A「Bさん、この前頼んだ仕事、できました？」

B「あっ、ごめんなさい。忘れてた。」

A「私、昨日も頼みましたけど。いったいいつまでに_____。」

B「明日までに、必ず。」

a終わらせますか b終わらせるんですか

(16-1)（会社でAさんが、お土産を配っています。）

A「お土産です。どうぞ。」

B「Aさん、どこへ_____。」

A「箱根です。この前の日曜日に。」

aいらっしゃいましたか bいらっしゃったんですか

キ：YN疑問文…共有する前提Xがあり、名詞述語文や感想・嗜好・欲求を聞くものではない

(13)（Bさんは今、勉強しているところです。）

A「Bさん、食事に行きませんか。あっ、ごめんなさい。_____。」

a勉強していますか b勉強しているんですか

(15) A「Bさん。Cさんが会社をやめるそうですよ。」

B「えっ。_____？」(略)

aやめますか bやめるんですか

(16-2) (16-1)のつづき

B「ご家族と ②。」

A「ええ。子供と。」

aいらっしゃいましたか bいらっしゃったんですか

ク：YN疑問文一名詞述語文や感想等を聞くものであり、かつ特別な含意を持つもの…無し

<「のか」非使用条件>

(H)：WH疑問文—前提が未定

(3) (Aさん、Bさん、Cさんで旅行の計画を立てています。)

A「Bさんは、どこがいいですか？」

B「京都がいいですね。」

A「Cさんは？」

C「私も 京都」

A「じゃ、京都にしましょう。_____。」

C「11月はどうですか。紅葉がきれいですよ。」(略)

aいつにしますか

(K)：WH疑問文—中立的・客観的である。もしくは感想・嗜好・欲求等を特別な含意なしに聞くもの

(16-3) (16-2)のつづき

B「どこが_____。」

A「閑寂の森ですね。」

aよかったですか bよかったんですか

(H)：YN疑問文—共有する前提Xがない

(12) (Aさんは、山田先生に電話をして、クラスのパーティーに先生が来るかどうか、聞きます。)

A「山田先生 いらっしゃいますか。」

山田先生「私ですが。」

A「Aですが、土曜日にやるクラスのパーティーの話ですか。」

山田「ええ。知っていますよ。」

A「先生、_____。」

山田「行きますよ。6時からですね。」(略)

a いらっしゃいますか b いらっしゃるんですか

(17) (テレビで)

アナウンサー「今日は、夏休みの海外旅行についてです。テレビをご
らんの皆さんは、夏休みに海外旅行へ_____。」

a いらっしゃいましたか b いらっしゃったんですか

(ハ) : YN疑問文一名詞述語文や感想等を聞くものではなくかつ特別な含意
が無いもの

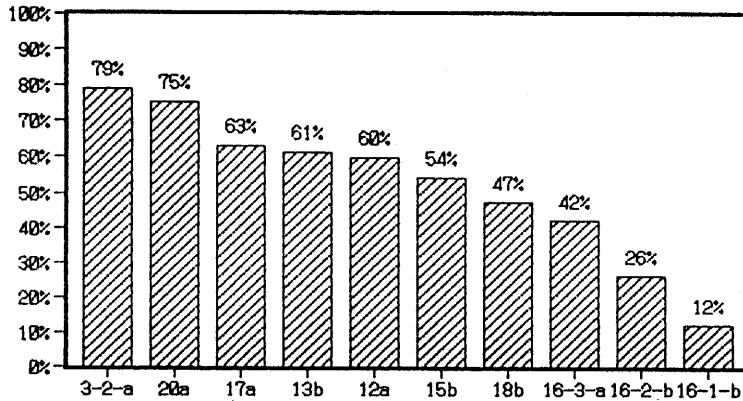
(20) (学校で。Bさんが図書館の方向へ歩いています。)

A「Bさん、こんにちは。_____。」

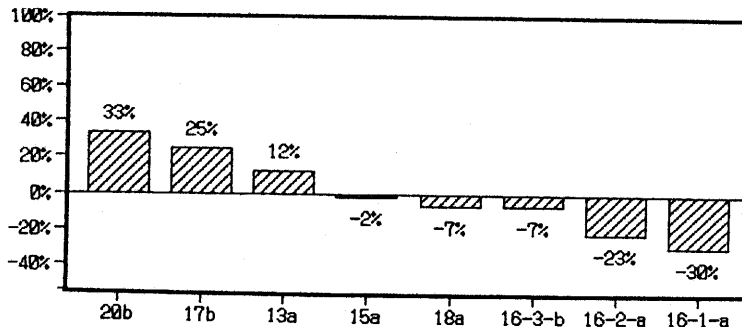
B「ええ。本を返そうと思って。」

a 図書館ですか b 図書館なんですか

グラフ 5

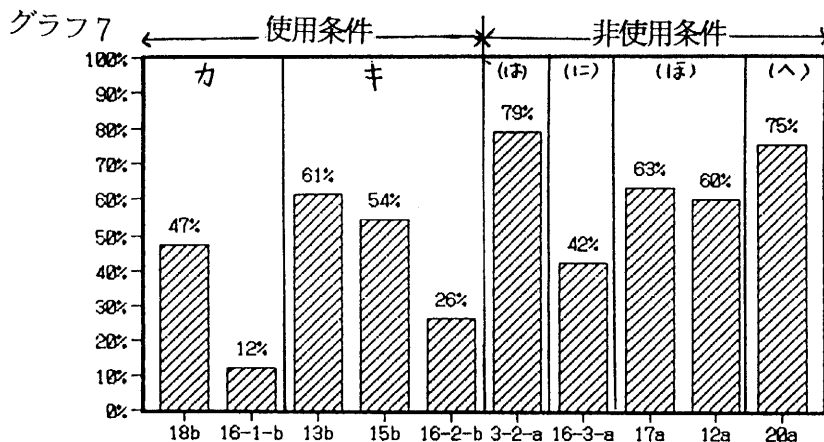


グラフ 6



「のだ」と同様に「使用文」を習得指数の高いものから並べたもの(グラフ

5)と「非使用文」を習得指数の高いものから並べたもの(グラフ6)を比較してみると、非使用文の習得指数の方が低いことがわかる。つまり、「のだ」文と同様に学習者は、「のか」文をそこで使うこともしくは使わないことはわかっていても、対応する「のか」不使用文(もしくは使用文)はそこでは使えないことへの理解度が低い。つまり簡単に言うと、「のか」を使わなくてはならない箇所もしくは使ってはいけない箇所でも、「使ったほうがいい」もしくは「使わないほうがいい」程度に理解しているということである。



グラフ7はグラフ5を使用条件および非使用条件別に並べ替えたものである。まず、使用条件では、WH疑問文(カ)よりYN疑問文(キ)の方が習得指数が高くなった。YN疑問文はまず共有する前提Xがあれば、名詞述語文や感想・嗜好・欲求等を聞くものを除けば「のか」を使用することができる一方で、WH疑問文は前提Xは当然存在するものであり、さらに前提が既定かどうか、関心・驚き・非難等の含意があるかどうか「のか」を使用する条件である。その為、YN疑問文の方が習得はたやすくなると考えられる。さらに設問内容を検討する。カキの中で、一番習得指数が低い設問は16-1-b、次に16-2-bである。まず16-1-bについて考える。話し手は会社の同僚が配るお土産を見て、「Aさんはどこかへ行った」ということを判断した。その前提Xは過去のことであり、もちろん既定である。とすると中立的に質問するか関心・驚き・非難等の含意を含んで質問するかとなるが、この場合、「のか」を使わないと中立・客観的でいささか冷たい感じとなる。同僚には、親しみをこめた関心を示すことのできる「のか」文がよりふさわしい。しかし一方で16-3-aの様に感想

を驚き・非難等の含意無しに尋ねるときは、「のか」文は使わない。また、16-2-bの様にYN疑問文の場合は共有する前提X（この場合はAさんが家族で旅行へ行ったに違いないと話しか半断したこと）があり、名詞述語文や感想・し好・欲求等を聞くものではなければ「のか」を使う。この調査の結果から考察すると、学習者にとっては、非難とか憤慨（例18b）、驚き・意外（例15b）といった含意を「のか」に込めることができることよりも、相手に親しみをこめた関心を持っている場合に「のか」を使うべきなのか使えないのか（例16-1、16-2、16-3）ということの方が難しいようだ。次に非使用条件では、前述したように16-3(κ)の習得指数が低い。感想・し好・欲求を驚き・非難等といった含意無しに聞くときは、WH疑問文、YN疑問文に関わらず「のか」は使えないことの指導が必要であろう。

5. おわりに

以上「のだ」「のか」の会話文における習得の困難点、誤用を起こしやすい点を文法判定テストによって考察した。以下にまとめる。

① 「のだ」「のか」共通

- 「のだ」「のか」をそこで使うことがわかっている場合でも、対応する「のだ」「のか」不使用文は使えないことへの理解度は低い。
- また、「のだ」「のか」をそこで使わないことがわかっている場合でも「のだ」「のか」使用文は使えないことへの理解度は低い。

② 「のだ」について

- 前提Xが想定できるものよりできないもののほうが難しい。
- ア「因果関係」、イ「判断、要求、勧誘、ことわり等とその根拠」は相対的にいえば習得し易く、ウの「実情説明、言い換え」はそれに次ぐ。エの「本来述べたいことがあることを暗示する」はウより習得しにくい。
- 「～たいんですけど、…（～たいんですが、…）」という文型は習得しやすい。
- オの当為表現のうち決意を表すものが一番難しい。

③ 「のか」について

- XY疑問文（カ）よりYN疑問文（キ）の方が習得しやすい。
- 学習者にとっては、非難・憤慨・驚き・意外といった含意を「のか」に込めることができることよりも、相手に親しみをこめた関心を持つ

ている場合に「のか」を使うべきなのか使えないのかということの方が難しい。

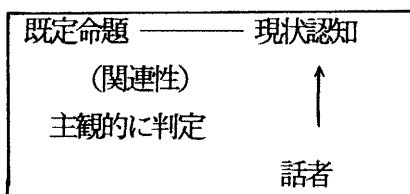
○感想・し好・欲求を驚き・非難等といった含意無しに聞くときは、WH疑問文、YN疑問文に関わらず「のか」は使えないことの理解が難しい。

本稿では、文法判定テストで出た結果をもとに「のだ」「のか」の習得の困難点を挙げたが、この困難点が何に因るものかについては①インプット（教科書、学習環境等）②母語の干渉・転移③「のだ」「のか」自体の持つ使用条件等の難しさなどが予想される。それらについては本稿は触れなかったが、考察が必要であると考えている。

また、今回は文法テストのみにとどまったが、今後、会話における使用実体を発話資料から採取し分析することが必要であると思う。

<注>

1. 本稿の研究対象は「の（ん）だ」「の（ん）です」「なの（ん）だ」「なの（ん）です」、女性形「の」「なの」（統一して記述する場合は「のだ」とする。）およびその疑問表現「のか」「の（ん）ですか」「なのか」「なの（ん）ですか」「の」「なの」「の（ん）だ」（統一して記述する場合は「のか」とする。）である。
2. 寺村(1984, P307)に以下のようにある。
「PハQノダ」という文型は、基本的には、典型的な題述文「XハYノダ」という文型と同じものだといってよいだろう。
3. 国広(1992, P19)では、「のだ」の意義素として、次のように図示している



4. 葉(1990)は学習者の使用教科書別に、いくつかの発話、作文の誤用例を提示している。小金丸(1990)は、作文における学習者の誤用例を分析し、誤用を防ぐための方策をいくつか提案している。
5. 金田一(1955)、佐治(1972)、林(1973)、田野村(1990)など。
6. 前提XとYの関係が因果関係の場合、Xが原因で、Yが結果になるものも

ある。但しその際には「だから、それで」等の接続詞が必要である。しかし

例) 頭が痛かった。それで昨日は休んだのだ。

という文は、「頭が痛かったから昨日は休んだのだ。」と言い換えることができることから考えると、「のだ」がフォーカスしているのは、やはり原因であると考えられる。

7. 水谷・水谷(1977, P101) に以下のような記述がある。

Thus questions ending in n-desu-ka can imply various emotions such as concern, surprise, irritation, and criticism

8. 実施フォーマットは分かち書き、ルビ付き、漢字使用を制限したものであり、状況や人間関係を説明した文を付けた。

<主要参考文献>

金田一春彦(1955)「日本語」『世界言語概説下巻』(研究社)

国広哲弥(1985)「『のだ』から『のに』・『ので』へー『の』の共通性ー」

『日本語研究と日本語教育』(名古屋大学出版会)

小金丸春美(1990)「作文における『のだ』の誤用例分析」『日本語教育』71号

佐治圭三(1972)「『ことだ』と『のだ』ー形式名詞と準体助詞(その二)」

『日本語・日本文化』第3号(大阪外語大学研究留学生別科)

田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』(和泉選書)

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(くろしお出版)

林四郎(1973)『言語教育の基礎編1文の姿勢の研究』第3章(明治図書出版)

葉照子(1990)「初級日本語学習者における『のだ』の使用例からみた誤用の類型について」『九州大学留学生センター紀要』第2号

水谷修・水谷信子(1977)

『Nihongo Notes 1 Speaking and Living in Japan』

(The Japan Times)

(お茶の水女子大学日本言語文化専攻修了生)